過ぎし日の魅惑的なシヴァラートリ・ショー

ジャネット・ボック・ビッカー女史

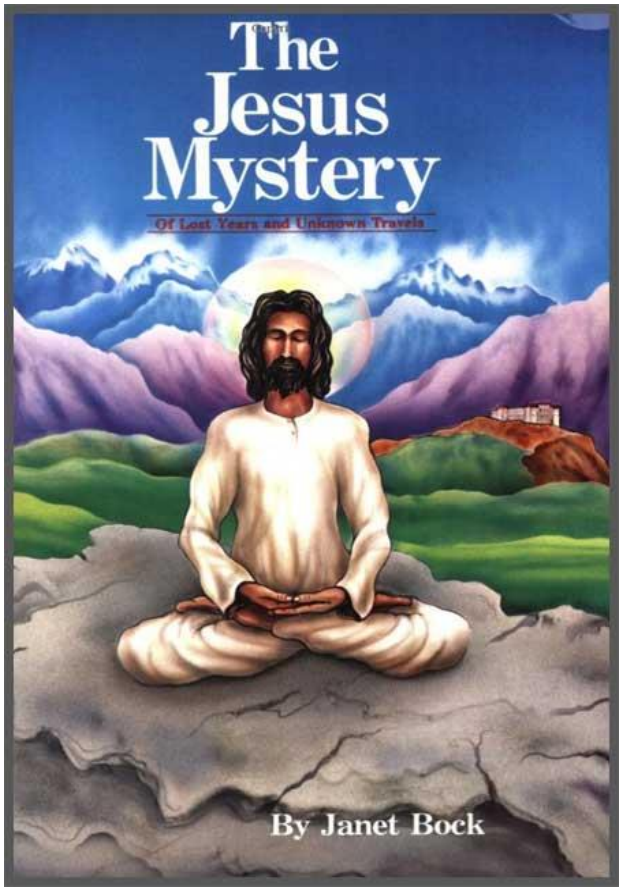
私は、1941年11月24日にカリフォルニア州ロサンゼルスで生まれました。父は、スウェーデンの北部、林業を営む地域出身の移民で、その地域の男子聖歌隊を創設したメンバーの一員でした。父は音楽をとても愛していました。父の母国語の会話を学んだことは一度もなかったのですが、外国語の発音を聴く耳が養われたことは、後に私がテルグ語やサンスクリット語でバジャンを歌う練習をするのに役立ちました。母の家系もまた移民で、ネブラスカ州で農業をしていました。父方の家族も母方の家族もルーテル教会に属していて、両親は、たいてい休日は教会に出席しており、弟と私は、毎週日曜学校に連れて行かれました。父親の音楽好きを受け継いだ私は、5歳の誕生日が来る前にピアノを習い始め、ついにはサンタバーバラのカリフォルニア大学でピアノ科の学士号を取得するまでになりました。大学では声楽も学び、コーラス、演劇、オペラ、コメディミュージカルにも参加しました。大学 4 年生になる前の夏、私はアメリカの軍隊と現地の大学生を慰問する16人の生徒のうちの1人に選ばれました。慰問団は、日本、韓国、沖縄、台湾をめぐる2か月間の遠征旅行をする予定でした。

この旅には、やがてアヒムサー（非暴力）に焦点を合わせたカルマの道〔行動の道〕の一部として、私が後に気づき始める要素がたくさんありました。飛行機で太平洋を横断中、大気中でスターフィッシュプライムの発射テストが行われていました。アメリカが爆発させた最も大きな水爆の1つです。気がつくと、私は日本の広島市の親切なご家庭に一晩お世話になっていました。広島は第2次世界大戦中、原爆が落とされて町が破壊され、多くの人々が被害を受けた場所です。朝鮮では、北と南の非武装地帯の南側〔韓国側〕の国境に立ちました。その時は気付かなかったのですが、私たちのグループが公演していた軍事基地は、私の異母兄が朝鮮戦争の戦いの最中に亡くなった場所から、たった数マイルの場所でした。

卒業後、ヨーロッパ、中東、北アフリカ、そして東と西の両パキスタンに駐屯するアメリカ軍のためにカレッジ・コースを提供しているアメリカの大学での仕事のオファーがありました。そして、2年半の間、私はドイツのハイデルベルクにある後方支援オフィスでアシスタントとして働きました。私は軍用列車に乗ってベルリンまで行き、そこからチェックポイント・チャーリー〔検問所〕のあるベルリンの壁を通り抜け、東ベルリンまで出張しました。小さな緑色のフォルクスワーゲン〔ドイツ車〕をひとりで運転しながら、スウェーデン、フランス、オーストリア、スイス、イタリアを訪れました。そして、3週間の旅行で、共産圏のユーゴスラビアとブルガリアを通って、

トルコとギリシャまで運転しました。

1978 年、イエスがインドで過ごした年月に関するスワミのご講話にインスピレーションを受けて書かれた本 →



南カリフォルニアに戻ってすぐに、私はヴェーダーンタ・テンプル書店の虜になり、ラーマクリシュナの人生の記述やスワミ・ヴィヴェーカーナンダの書物に没頭するようになりました。リバティ・レコードでの仕事を見つけてから18ヵ月後、パンディット・ラヴィ・シャンカール（シタール奏者）のレコードをプロデュースしていたリチャード・ボックと出会いました。私たちは2人ともインドに関する物事に興味を持っていたので、一緒にインドラ・デーヴィーの講演会に行くことになりました。そこで、インドラ女史は自らの経験を語り、バガヴァン・シュリ・サティヤ・サイ ババの白黒のニュース映画を上映したのです。私は、ババに関する一枚の写真と、ババのグループの一員としてアフリカ旅行から戻ってきたばかりのマーケルとボブ・レイマーから借りた本を2～3冊持っていました。リチャードは、1968年11月、ババの43歳のご降誕祭にインドでインドラ・デーヴィーと知り合い、8ミリフィルムと、ババの声を録音したものを持って戻ってきました。その録音は後に、『サティヤ サイババ、バジャンを歌う』（'Sathya Sai Baba Chants the Bhajans'）と題した LP レコードになりました。

1969年、私たちはインドラ・デーヴィーと一緒にサイ財団を立ち上げ、その年の10月にハリウッドのサティヤ・サイ ババ・センターを開設しました。

ババのダルシャンを受けたいという気持ちは膨らみ、私は、他の人と一緒に行けるようになるのを待つことをやめて、1人でインドに行くことに決めました。下記の記事（本からの抜粋）は、1970年、私がバガヴァンと過ごした1ヵ月間の滞在中に経験した、シヴァラートリの2日間について述べたものです。インドから戻った後、リチャードと私は結婚し、長期の旅を続け、1988年にリチャードが亡くなるまでババに関する映画を作り続けました。“His Life is His Message”、“Celebration”、“Aura of Divinity”、“Universal Teacher”（1巻～3巻）” “Endless Stream”などです。シヴァラートリに関する記述は、後に『イエスの謎、失われた

年月と知られざる旅』〔仮題〕として出版されました。この本はババがインスピレーションを与え、祝福して下さったもので、『聖書』の中では語られていないイエスの生涯の12歳から30歳までの年月について書かれています。

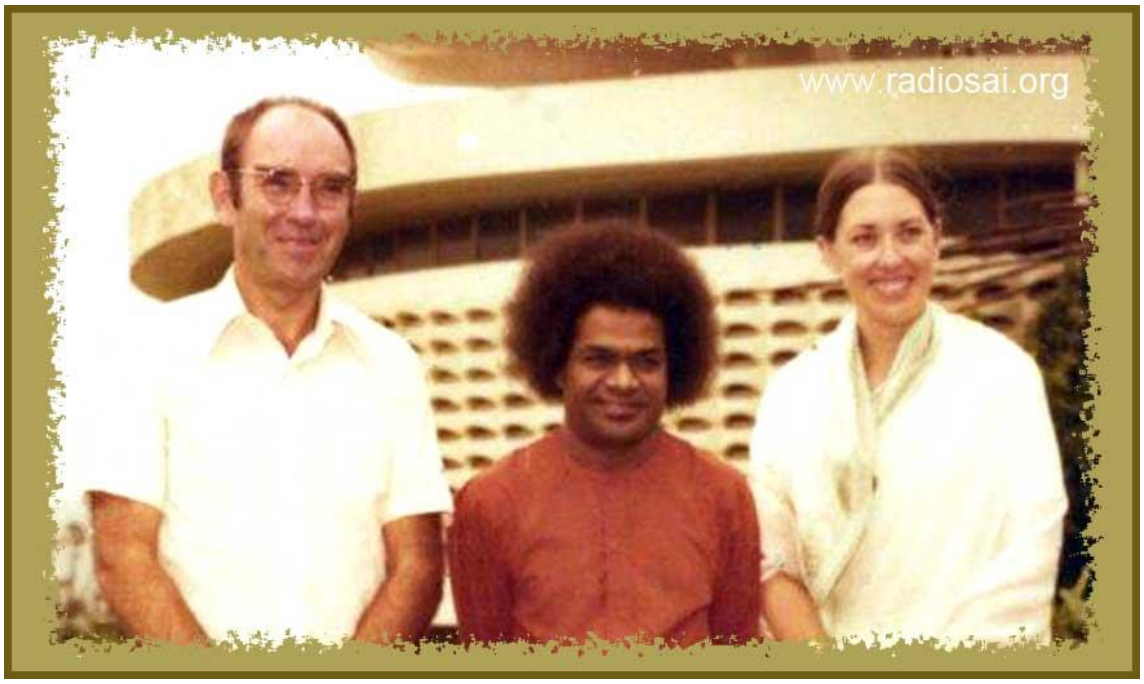
心理学で修士号取得を目指して大学院に通っていた時も、デニス・ビッカーとの 25 年にわたる結婚生活においても、ババは私の人生を導き続けて下さいました。デニスは、今はプラシャーンティ・ニラヤムに帰属しているサイ財団のフィルム、オーディオ、写真のアーカイブを創った、私のパートナーでもあります。
「私はあなたがまだ知らないあなたの事について知っています」（1985年、N・カスツーリ著、“Prashanti”P.71 より）というババの御言葉にもあるように、かつてババは、どうして質問者についてそれほど多くのことを知っているのか？ という問いに答えられたことがあります。私の経験ですが、ババは、私たちがまだ知らない私たちの事について知っているばかりか、私たちが人生の出来事に立ち向かえるよう鼓舞し、私たちがそうすると、さらに進んでその出来事の深い意味を理解するよう導いて下さるのです。

私が肉体のババの最後のダルシャンを受けたのは、ババのマハーサマーディ〔ご遷化〕の数ヵ月前、2010年の11月にデニスと私が“感謝の巡礼”をした時でした。1970年の初めてのダルシャンの時と同じくらい、2010年のババの一瞥は強力で、私の人生を引き上げてくれました。

ジャネット・ボック著『イエスの謎』pp.176－180
オーラブックス、カリフォルニア州ロサンゼルス、1980 年からの引用

インド滞在の最初の1週間が終わろうとする頃、人々がマハーシヴァラートリというお祭りのために集まり始めた。1年のうちで最も大切な聖日の1つだ。このお祭りは、2月から3月にかけての新月の日に、インドのいたるところで執り行なわれる。月の暗さは重要とみなされている。というのも、月は心〔マインド〕を支配する神として認識されていて、月が満ちている（満月の）時は心が狂暴になるからだ。そのため、西洋人は“ルーナティック”（狂気）という言葉を使う。反射された月からの光が、か細い弧を描くまでに弱められると、心は静まり、世俗的な傾向は霊性修行によってより楽に克服できるようになる。毎年、この日は昼も夜も、瞑想や断食をしたり、神の御名を歌唱したりして過ごすのだ。

プラシャーンティ・ニラヤムのサイ ババの御前では、シヴァラートリはさらなる意味を持つようになる。長年行われているリンゴードバヴァ〔肉体からリンガムを出現させること〕という独特な行事がそれだ。その時に、ババはご自身の体の中で物質化された1つかそれ以上のリンガムを取り出す。これらのリンガムは、さまざまな色と透明度をした楕円形の石で、時として3～4インチ〔7.5～10センチ〕もの長さがある。リンガムは無相が有相化することの象徴である。この瞬間、無限なるものが種や卵として認識される有限の形を取り、そこから新たな命、この場合は霊的な命が生まれる。



リチャード&ジャネット・ボック夫妻とババ。ムンバイのダルマクシェートラにて

午後の訪問はバルビールと一緒だった。彼女は2年前のシヴァラートリ祭について語ってくれたのだが、その時、ババはバルビールの義理の娘である、ジンド〔ハリヤーナ州〕のマハーラーニ、プリティヴィ・ビール・カウル妃殿下にリンガムを与えられたそうだ。そのプリティヴィが間もなく到着する予定だった。プリティヴィと出会った時、彼女に関することで私の心を打ったことがい

くつかあった。彼女の名前はサンスクリット語で「地球」もしくは「世界」を意味し、彼女の豊かな生命力は、そのお茶目な機転と、キラキラ輝く一対の黒い瞳、美しい笑顔を通して表現されていた。いまだに不思議に思うのだが、南カリフォルニアの労働者階級出身の私のような者が、エキゾチックな東洋の国の王族として育った人と共通するものがたくさんあった。私たちはすぐに打ち解けて、過去の嬉しかったことや悲しかったことについて、大学のルームメイト同士が再会したかのように語り合っていた。

シヴァラートリ祭での最初の行事は、マンディールのてっぺんから旗を掲げる儀式だ。続いて、オーディトリアムと呼ばれる、屋根のない観覧席が周りにある長方形のパビリオン〔仮設テント〕で、ヴィブーティ・アビシェーカム〔神聖灰の灌頂式〕が行われる。私はお祭りに来た人々のためにボランティアを頼まれ、2日間キャンティーン〔食堂〕で野菜を切ったり、短い取手のほうきで地面を掃いたりした後、今度は人々が前に押さないよう監視してほしいという指示を受けて、観覧席の真ん中の通路の女性側、前から約10列の受け持ちに配属された。

（左）シヴァラートリ祭の早朝ダルシャン。この後に旗上げの儀式が続く。（右）旗が広がり、花びらがまかれている。

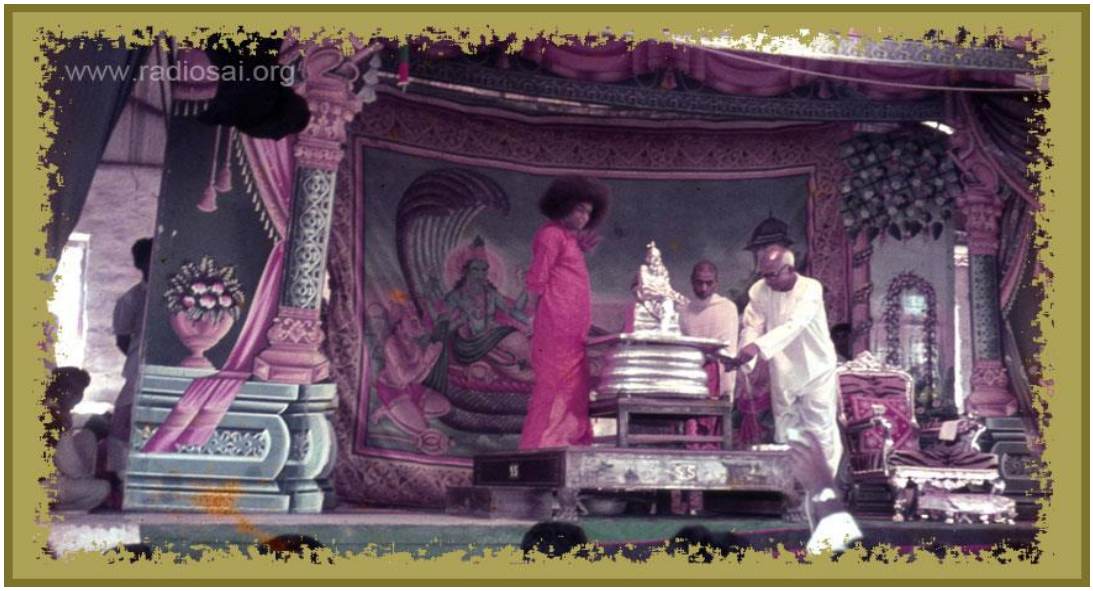
オーディトリアムは、朝の式典を見に来た人々で埋め尽くされていたが、さらに人々が集まって来た。外にプリティヴィがいるのを見つけたので、私の方へ来るように合図した。プリティヴィはどうにか人混みを通り抜けてやって来たので、私は彼女が通路側の席に座れるよう少し移動した。バジャン・リーダーが歌い出し、すべての人の視線はババが入場する場所に注がれた。その時だった。私の感情をせき止めていたものがあふれ出した。至高の象徴化とそのショーを観察して、合理的な視点を保とうとしている私の心〔マインド〕の一部が、より大きな力を持った何かに直面したのだ。突然、私にはババと巨大な群衆の間で生み出される静かな霊的エネルギー

の圧倒的なほとばしりが見え、同時にそれを感じていた。

　ババは遠くから現れ、ゆっくりと真ん中の通路に向かって歩いて来られた。それから、パビリオンの一番端まで引き返した。その間、ババはずっと左右を振り返りながら、人々を祝福するために両手を上げていた。涙が流れ出し、どんなに頑張っても涙は止まらなかった。私に出来ることと言えば、せいぜい自分のサリーの先を頭上まで持ち上げて、その先で自分の目を拭うことぐらいだった。

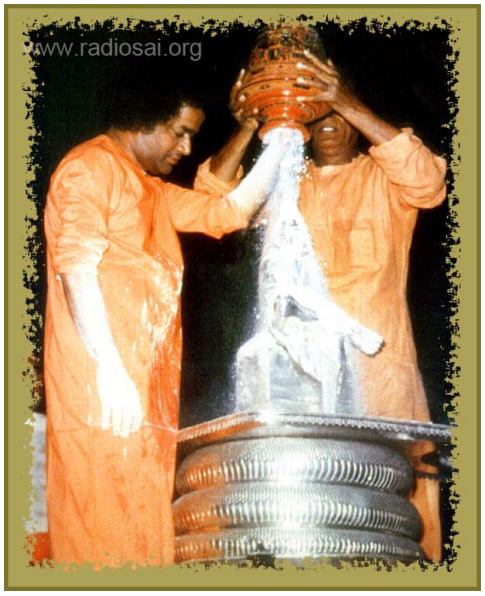
　ババが近づいて来られた。ババの視線は人々を見渡していた。私の隣では、プリティヴィがババから特別に認知されるのを期待していて、私は、せめてその場に居合わせてそれを見たいと思っていた。最後にもう一度サリーで目を拭い、ババが通り過ぎるので見上げると、ババの視線は大群衆を見つめていた。次の瞬間、何が起こっているのか気づいた時には、すでにババが頭をこちらに向けて、一瞬だけババの視線が私の目に釘付けになった。清らかなエネルギーをたたえた表情だった。肉体がそのエネルギーで充電されたと感じた時、私の感情は変容し、平安に満たされた。プリティヴィが私の方を振り返り、怒ったような顔で、笑いながらささやいた。「あなたが席を譲ってくれたから、私がこんな表情を見せることになったのよ」

　ところが、不思議がったり何かコメントしたりする時間はなかった。すでにババがステージの真ん中まで来て、シルディのサイ　ババの銀像の横に立っていたのだ。パンディットの１人が水の入った水盤を持ち、ババが両袖を肘のところまでたくし上げて、その像を沐浴させてから、拭いて乾かす儀式が始まっていた。



シルディのサイ ババの銀像を沐浴させる儀式

プリティヴィは、その神像に付けるお守りのようなものをババが物質化するかもしれないからと、私のために小さな双眼鏡を持ってきてくれていた。ババが以前にも出したことがあったからだ。プリティヴィは、ババの一挙手一投足を見つめていた。海が凪いだように静かになり、彼女は急いで見るように私に双眼鏡を手渡した。私が双眼鏡を両眼に当てると、ババの手が動き始めた。そして、神像にフォーカスした時、ババの空っぽの右手の親指と人差し指の間の空間から、小さな金の宝石台が物質化されたのを見た。その宝石台には8つの深紅の石が付いており、中央の9つ目の石を取り囲んでいた。それが現れるやいなや、ババはそれを神像の額に押し当てて、そこにはめ込んだ。私はすぐさま双眼鏡を返した。



今度は、カストゥーリ氏が18インチ〔約46センチ〕程の高さの壺を持って現れた。これはヴィブーティ・アビシェーカムで用いられるものだ。それは神像を灰で沐浴させる儀式のことで、灰はすべての形ある物質の究極の状態を象徴している。 空っぽの壺が神像の上でひっくり返された。何も起こらなかった。それから、ババが壺の中に右手を差し入れると、ヴィブーティがどんどん、どんどん流れ出てきた。灰は、最初に神像を覆い、それから像が置かれている土台を覆い、ついには観客席にまで流れ出ていった。前列にいたラッキーな人々は、急いで灰をかき集め、一方、私たち残りの者はその芳香を味わっていた。

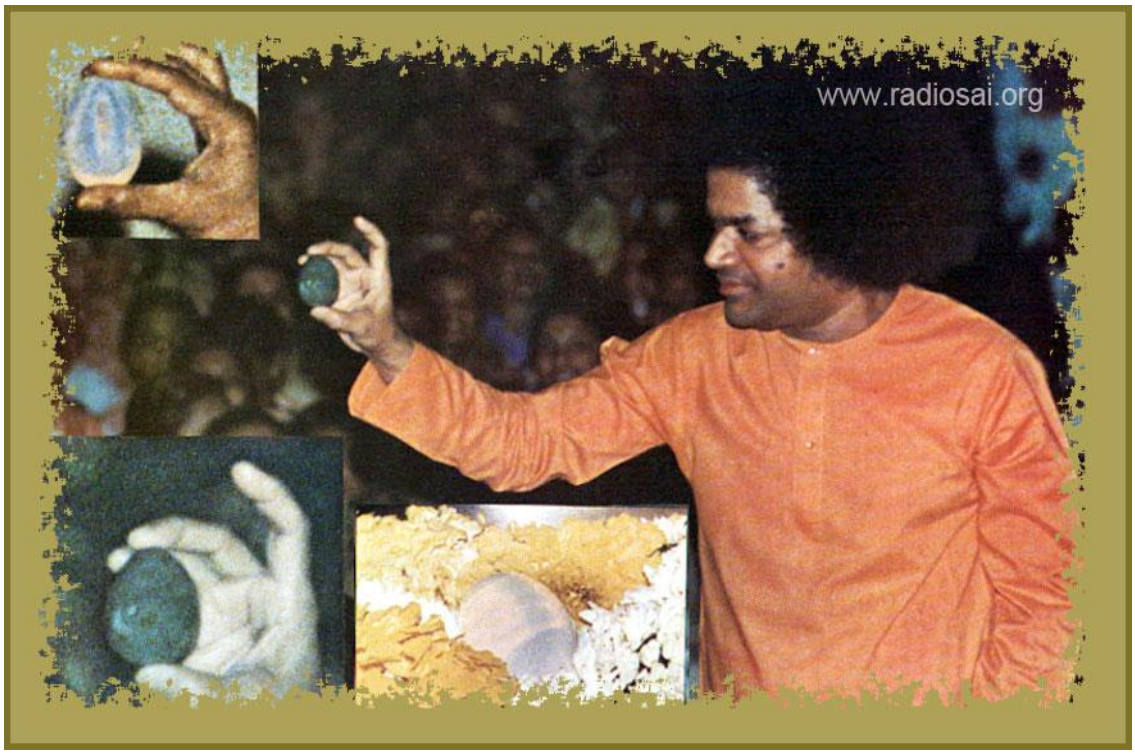
空っぽだった容器からヴィブーティを物質化するババ

それから数分が経って、柔らかな甘い香りの神聖灰が会場全体を包んだようになり、ババの両腕とローブが真っ白になった時、ババは聴衆に向けて右手を上げて微笑み、幕の後ろへと消えていった。ババが去ったことに気づいたとたん、人々が立ち上がったり、ステージの方へ押し寄せたりする波のような動きがあり、私たち皆がその人波に動かされた。

アシュラム中で、何か巨大な時計のぜんまいが動いているかのように、人々がぞくぞくと集まってくる気配が高まった。宇宙そのものの動きだったのかもしれない。夜中にバスが到着し、あらゆる村の人々が何マイルも歩いてやって来た。シヴァラートリは沈黙と断食の日でもあったので、私たちはお昼の食事を摂らず、休んでリンガムの出現を待った。

夜の行事は、シャンーティ・ヴェーディカという、『バガヴァッド・ギーター』のシーンが美しく描かれた高いハ角形の演壇を前に、屋外で行われた。まず帰依者たちのスピーチで始まり、それからババが宇宙に存在する原子の１つ１つに宿る、すべてをつなぐ神の側面について語った。ババはまたエゴを取り除くことについても語った。ババはおっしゃった。

「自分が肉体であるという意識と、感覚を通して満たされる肉体の欲求を消し去ることが、人生の主要なポイントです。なぜなら、あなた方はそれらの欲求が満たされれば喜び、そうでなければ嘆き悲しみ、何か邪魔が入れば怒り、競争相手に勝てばうぬぼれるからです」



さまざまなシヴァラートリ・リンガムを手にするババ

エゴを取り除くために、すべてのものは神のものであり、あなたは信頼されてそれらを任されているのだという思いを強く持ちなさい。この思いはうぬぼれを防ぐばかりか、このことは真実でもあるからです。そうすれば、何か物を失った時に嘆き悲しむことはないでしょう。神が与え、神が取り上げたのです。もちろん、今話したことのほとんどはあなた方の耳に入っていますね。人々は、こんな調子で話をして、このようにすれば良いとアドバイスしますが、自分自身がそのアドバイスに従っている人はほとんどいないません。これはすべての罪の中で最も大きな罪です。口で言ったことと正反対のことをして、自分が教訓として主張しているのに、それを実践することを否定しているのです」

スピーチが終わった後、ババは歌い始めたのだが、数分後に咳をして、座ってしまった。バジャンのリーダーが取って代わって歌った。ババは時々、額を拭いながらコップの水を飲んでいた。今やババが感じている発作は見た目にも明らかだった。ババは何度も喉を詰まらせていた。そうして、ババが手を伸ばして白いハンカチを手にした時、私たち皆が、ババの口から光が流れ出るのを見た。ババはそれを手に受け止め、持ち上げた。それはリンガムだった。乳白色で、すべすべして、内側から光り輝き、神性の象徴化だけでなく、その本質がいきいきと息づいていた。

女性の側でヴィブーティを配っているババ

リンガムが生み出された後、帰依者たちは夜通しバジャンを歌い続けた。夜明けにババがダルシャンのために現れ、その後、午前中にヴィブーティ・アビシェーカムの時に出したヴィブーティ

を配るために戻って来られた。ヴィブーティは、ボランティアの人たちが正方形の紙を折って包んでいた。ババは何時間も祈りの会場の前に座り、カーブして列をなしている帰依者たちの間を歩いた。地面はどこも平坦だった。私はそれらの光景を時おり眺めていた。私を魅了したのは、もはや巨大な数の群衆ではなかった。私を感動させたのは、ババが、静かに座っている何千人もの人々に、手渡しでヴィブーティを与えていることだった。ババのローブの袖は肘までたくし上げられ、絶え間なく群衆の間を移動している間中、ババの衣服は汗で背中と胸にぴたりと張り付いていた。「私はあなた方の召使いです」とババがおっしゃるのを聞いたことはあったが、今や、私はそれが真実であることを理解したのだ。

出典：http://media.radiosai.org/journals/vol_12/01FEB14/Janet-Bock-shivaratri-sathya-sai-baba-radiosai.htm